



Title	アイヌ語における文法的カテゴリーの転換について：語と句、動詞と名詞の相互関係をめぐって
Author(s)	佐藤, 知己
Citation	北方言語研究, 10, 219-230
Issue Date	2020-03-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77596
Type	bulletin (article)
File Information	13_219_230.pdf



[Instructions for use](#)

アイヌ語における文法的カテゴリーの転換について — 一語と句、動詞と名詞の相互関係をめぐって —

(北海道大学大学院文学研究院)

佐藤 知己

キーワード: アイヌ語、品詞、転換 (conversion)、合成名詞、形式意味論

1. はじめに

本稿は、アイヌ語の「合成名詞 (複合名詞とも呼ばれる)」の分析において、動詞から名詞への品詞転換、句から語へのカテゴリー転換という二つの文法的カテゴリー転換が共に重要な役割を果たしていることを、これまでのアイヌ語の研究史を概観することによって確認し、さらに、未解決問題として残されている、自動詞 (一項動詞) から名詞への品詞転換を可能にしている要因とは何かを論ずるものである²。具体的には、形式意味論的要因が転換において重要な役割を果たしている可能性を、完全動詞 (ゼロ項動詞) との対比を通して明らかにすることを試みる³。

2. 合成名詞の構造からみたアイヌ語の動詞由来転換名詞の重要性

アイヌ語における自動詞から名詞への転換の要因を検討する前に、アイヌ語研究においてなぜ文法的カテゴリーの転換が重要なのかを、合成名詞の研究史を概観することにより簡単に述べておく⁴。

アイヌ語動詞の名詞への転換現象そのものは、知里 (1974/1936: 45-47) が早くに指摘している。知里は、第二類動詞 (自動詞) は名詞として用いることができると述べて、例えば、次のような例をあげている。

(1) atu 「嘔吐する、嘔吐」、ipe 「食事する、食事」、omke 「咳をする、咳、風邪」

また、第一類動詞 (他動詞) も、目的語の名詞や接頭辞と結合して第二類動詞になれば名詞として用いることができると述べて、次のような例をあげている。

¹ 本稿は、あくまでもアイヌ語研究への寄与を第一の目的とするものであって、現行理論を根底から覆すような反例をアイヌ語から与えようとするものでもなく、最新理論の妥当性を問題とするものでもない。あくまでもアイヌ語における未解明の事実を明らかにすることに主眼がある、ということをお断りしておきたいと思う。なお、アイヌ語の例は、各著者の引用に現れた例以外は、特に断らない限り筆者が千歳方言話者白沢ナベ氏からご教示いただいたものである。ここに記して感謝申し上げます。また、筆者の専門外に属する論理学、形式意味論の部分については、北海道大学大学院文学研究院博士課程の澤崎高広氏にチェックしていただいた。ご協力に深く感謝申し上げます。ただし、何か誤りがあれば、それは筆者一人の責任である。

² 以下では、品詞転換と、句から語への転用を総称して、「文法的カテゴリーの転換」と呼ぶことにする。

³ 以下で扱う品詞の「転換」とは、亀井他 (編著) (1996: 963-964) が「語がその形態を変えずにある品詞から別の品詞に転移する現象」と述べているものを指す。

⁴ ここでは「合成名詞」を語幹の合成によって作られるもの (door-knob のようなもの) を主として指す用語として用いる。

(2) hat-kar 「葡萄を採る、葡萄採り」⁵

知里によるこれらの指摘のアイヌ語研究における重要性を明確にしたのは切替 (1984)である。切替は知里 (1974/1956: 379)が述べたアイヌ語の合成名詞の構造に関する定式化を問題とする。知里はアイヌ語地名を例として、yuk o-san nay「鹿が出てくる沢」のように yuk nay osan「鹿が沢に出て来る」のような「元の文」が想定できる構造がアイヌ語の適格な合成名詞である、という主旨の主張を行っているが⁶、切替はアイヌ語の合成名詞として適格であるにもかかわらず知里の定式化に従わないものがあることを指摘する。

(3) i-sapa-kik-ni

もの-頭-たたく-棒

「もの (魚) の頭をたたく棒」

切替によると、i-sapa-kik-ni という合成名詞は、元の文に返そうとすると、「棒がもの頭をたたく」という文になってしまい、通常のアイヌ語文では許容されない文になってしまう (切替の主張を敷衍すれば、日本語の研究において「外の関係」と呼ばれる構造 (日本語文法学会 (編) 2014: 347)ということになる) ⁷。さらに、切替はこの種の合成名詞は、知里が取り上げているものとは全く異なり、「名詞+名詞」という構造になっているために、「内の関係」に従っていなくても適格になる、という主旨の主張を述べる (ちなみに、「名詞+名詞」型の合成名詞は、アイヌ語ではごく一般的な合成名詞の構造である)。なお、切替 (1984: 113)は、知里が例としてあげている yuk o-san nay「鹿が出てくる沢」のような「主語+他動詞+名詞」型の合成名詞は、知里の定式化に完全に合致するにもかかわらず実際には単語としてはほとんど見いだすことができないという重要な指摘を行っている⁸。ただし、その理由として「合成語としてのまとまりが足りない」と述べるのみで、十分な説明を行っているとは言えない。以上から、ここまでの問題点をまとめると次のようになる。

- A. 知里は地名を例にあげて「内の関係」がアイヌ語の合成名詞の形成の基本であると説明しているが、それは妥当か。
- B. 切替は知里の定式化は認めつつ、それに合わない事例を、自動詞の名詞への転換によって説明するが、その説明は妥当か。
- C. 切替は「内の関係」に従っているにもかかわらず、合成名詞にほとんど現れない「主語

⁵ kar「採る」(他動詞)が目的語 hat「ブドウ」を抱合して、hat-kar「ブドウを取る」という自動詞を形成している。

⁶ 知里の指摘は、アイヌ語の合成名詞は、「元の文」に返すことができる構造 (日本語の研究では「内の関係」と呼ばれる構造 (日本語文法学会 (編) 2014: 347)) をしている、と要約することができる。kamuy osinot mintar であれば、kamuy mintar osinot「神が広場で遊ぶ」を「返す」ことができるので、適格な構造であるということになる。

⁷ 切替がここで挙げている例は「道具」から「動作主」への換喩 (metonymy)とみることもできるので必ずしも適切でない。本来であれば、wakka-ku-ontaro「水・飲む・樽」のような例のほうがより適切であろう。

⁸ 切替自身は、eper se sito「熊が背負う餅」という例を挙げている。

「+他動詞+目的語」型が稀である点について、「合成語としてのまとまりが足りない」と説明しているが、その具体的内容は何か。

佐藤 (2008a, 2008b)は、これら A、B、C について考察を加えたものである。A については、知里 (1974/1956)の出している例は句のものであって、合成名詞という、語の構造の説明としては不適切であることを指摘する。特に、句の場合、動詞は人称変化を必要とするが、人称変化は統語的要素であるので、語においては通常排除されるものなのであり、Di Sciullo and Williams (1987)が述べている語形成の普遍的な原理の一つである語の「統語的原子性 syntactic atomicity」に抵触するものである、と述べている。B については、知里の定式化を基本的に認める切替も同じ問題を有していること、自動詞の名詞への転換が、動詞の人称変化をキャンセルし、統語的原子性への違反を回避する役割を果たしているのであり、実はこの型こそ、本来の合成名詞の条件を満たしていること、従って切替が「擬似修飾構造」という名称を用いて、例外的なものとしてこの型を扱うのは適切でないことを指摘している。C については、この場合、他動詞が自動詞化するとすれば、主語が他動詞と合成されることになるが、主語の他動詞への合成 (他動詞主語抱合) は、アイヌ語においては極めて例外的であるので (佐藤 2012: 42)、自動詞化がほとんど不可能である。そのため、この型は、自動詞化して名詞に転換することができず、動詞は人称変化を必須とし、全体は句と解釈され、語とはみなされないため、このタイプの合成名詞は現れないと説明すべきである、と結論付けている⁹。

以上によって、アイヌ語の動詞を含む合成名詞の構造の問題の多くは、一応の解答を与えられたわけであるが、実は未解決の大きな問題が残っている。それは、知里が初めて報告し、切替 (1984)が合成名詞の説明に応用した、「自動詞の名詞への転換」がなぜ可能であるのか、という問題である。これは、一見、なんでもないことのように思えるかもしれないが、英語や日本語のような言語では必ずしもそうではないことを考慮すると、やはり説明が必要である。また、C に関連して、「主語+他動詞+名詞」型が少ない理由は言語学的に説明できたが、それでも極めて少数ながらこの型の語が存在することは否定できない。「自動詞の名詞への転換」について考察する前に、「句の語への転換」の問題について簡単に述べておく¹⁰。

⁹ これまでのところ、一例だけ例外がある。koy-yanke-ota「波が打ち上げた砂」(中川 1995: 179)。この例において koy-yanke「波が打ち上げる」は、例外的に主語が他動詞に抱合されて形成された自動詞である。従って、他の自動詞と同様に名詞に転成可能であり、ota「砂」と合成名詞をなしていると考えられる。ただし、本文中でも述べたが、このような他動詞主語抱合の例は極めて稀であり、従ってこの種のプロセスで生じたとみられる合成名詞の例も非常に稀である。

¹⁰ 句を語として用いる現象については、Bloomfield (1933: 180) が句単語 (phrase-word) という用語で言及しているが、プロセスそのものを指す用語は気付いた限り、ないようである。本来は句であるものを語として使用する、という現象であるので、品詞の転換同様、「転換」という用語を仮にここでも用いることにする。

3. アイヌ語における句から語への転換現象

実はアイヌ語の合成名詞の中には¹¹、上で述べたものとは全く異なるタイプのもが存在する。それらの中には、合成名詞なのか句なのか、簡単に判別することが容易でないものも含まれている。特に、形式名詞（付属語 *clitic*）*p/pe*「もの」、*hi(i)*「こと」、*usi*「ところ」を含むものには注意が必要である。これまでの研究においてはあまり注目されていなかったが、佐藤 (2008b: 269)が指摘しているように、これらは本来、前に人称変化を伴う動詞句を取って名詞句を作る要素である。「不器用者」は*「とっても不器用者」とは言えないが、アイヌ語の *aykap-pe*「不器用・者」は、一見、語のように見えるが、*[arikinne aykap] pe*「とっても・不器用な・者」と言えるので、本来は単語ではなく、句である。2.で述べた、自立名詞が主要部の場合と異なり、基本的には句を作ることしかできず、これらの付属語を含む「単語」は実はもともとは句であったものが語として用いられるようになった、「句単語 (*phrase-word*)」であると考えられる（動詞を含む日本語の句単語の例としては、「行く末」のような例が挙げられる。*「ゆっくり行く末」）。アイヌ語において単語としての扱いを受ける *asin-pe*「賠償物」、*a-mi-p*「衣服」も実は、もともとは「(それが) 出る・もの」、「人が・着る・もの」という句が語として定着したものと考えるべきであろう。中川 (1995)を分析すると、*p/pe* を含む形式で単語として採録されている形式は 24 例 (*cikoykip*「獣」など)、*hi(i)* を含む例は 1 例 (*atuy-esatsac-i*「海が・干上がった・場所」)、*usi* (*rukari-usi*「用を足す・場所」) を含む形式は 2 例のみである¹²。中川の辞書に採録されている名詞の総語数が 1020 であることを考慮すると、極めて低い数字である。このことは、これらが本来は句であり、個別的事情で散発的に語として認識されるようになったものだと考えれば合理的に理解される。

ここまでの議論から、切替 (1984: 113)が *eper se sito*「クマが背負う団子」のような例について「合成語としてのまとまりが足りない」と述べている特徴が何であるかを明らかにすることが可能となる。すなわち、他動詞主語を他動詞に抱合して自動詞を作ることがアイヌ語では一般に不可能であるので、**eper-se*「クマが背負う」という自動詞を作ることができず、そのため、*eper se sito*「クマが背負う団子」は、そのままでは語ではなく、通常は句と解釈されてしまう。それがこの形式の「合成語としてのまとまりが足りない」ことの要因になっていると考えられる。しかし、アイヌ語は、本来、句である形式を語に転用して「句単語」とする、「文法的カテゴリー転換」という語形成手段をさらに持っているために、何らかの文化的、社会的要因によって、本来は句であるこの形式が語に転換され、「句単語」としての資格を持つようになったものと考えられる。以上から、アイヌ語の語形成にあたっては、「自動詞から名詞への品詞の転換」、「句から語への転換」という二つの文法的カテゴリー転換がともに重要な役割を果たしていることがわかる。しかし、ここで注目されるのは、二つ

¹¹ 合成名詞はここでは「語幹の合成」を指すものとしてきたので、付属語を含む句単語を「合成名詞」と呼んでよいか、厳密には疑問がある。しかし、とりあえずここでは句単語も合成名詞の一種として扱うことにする。今後の課題である。

¹² 実はこの例は *usi* の前に節が置かれた例ではなく、*rukari*「用を足す」が名詞として用いられて、*us*「ある」、*i*「ところ」(付属語)と結合したものと見るべきであろう。文法的解釈としては、「用足しが・ある・ところ」、「用足しを・持つ・ところ」という二種が考えられ、どちらを取るべきが問題が残るが、いずれにしても本来は句の構造をした「句単語」の一種であることに変わりはない。

の文法的カテゴリー転換の性質の違いである。「句から語への転換」による句単語とみられる事例が極めて少なく、散発的な性格を持つものに対し、同じく転換でありながら、「自動詞から名詞への転換」は極めて規則的であり、事実上例外がない。以下ではこの点に注意しつつ、動詞から名詞への転換の問題をみていくことにする。

4. 英語とアイヌ語における動詞・名詞相互の転換

アイヌ語の動詞から名詞への転換について詳しく見る前に、英語における動詞・名詞相互の転換の例を簡単に見ておくことにする。このような簡単な比較によっても、アイヌ語の品詞転換が英語のそれとは大きく異なっていることがわかり、アイヌ語独自の規則を明らかにすることの必要性がより明確になると考えるからである。

Huddelston and Pullum (2002: 1640-1642)によると、英語の名詞由来転換動詞には以下のようなものがある。

(4) butcher 「肉屋、肉にする」、butter 「バター、バターを塗る」、can 「缶、缶詰にする」、cash 「現金、現金に換える」、eye 「目、じろじろ見る」、finger 「指、指で触れる」、fish 「魚、釣る」、panic 「恐慌、うろたえる」、ski 「スキー、スキーをする」、water 「水、水をやる」

逆に、動詞を名詞としてそのまま使う動詞由来転換名詞には次のようなものがある。

(5) arrest 「逮捕する、逮捕」、attempt 「試みる、試み」、cheat 「だます、ごまかし」、coach 「指導する、指導員」、control 「支配する、支配」、cough 「咳ををする、咳」、desire 「望む、欲望」、go 「行く、行くこと」、laugh 「笑う、笑い」、smile 「微笑む、微笑み」、spy 「偵察する、スパイ」、whisper 「ささやく、ささやき」

以上の例から明らかのように、英語は動詞由来転換名詞、名詞由来転換動詞のいずれも許す言語であると言える。また、日本語は動詞の形態構造がアイヌ語や英語とは大きく異なっているため、単純な比較は難しいが、日本語では少なくとも動詞と名詞は形態が異なるのが普通で、形から両者の区別が付きにくいということは普通はないと言ってよいと思われる。もっとも、いわゆる「連用形」が名詞としての機能を持つことがあるので、たとえば、「貸し」が名詞であるのか動詞であるのか、文脈がないと判断できない、というケースがあることは否定できない(日本語文法学会(編)2014:229)。他方、名詞語幹をそのまま動詞語幹として用いることは、「メモる」のような例はあるものの、無条件に自由に許容されるとは必ずしも言えない。これらを考慮すると、日本語の場合は、英語などとは違い、動詞と名詞の形の区別は比較的はっきりしていると言ってよいであろう。

さて、アイヌ語は、英語と同様に「転換」を許すが、英語とは違うところもある。まず、大きな違いとして、一般に、名詞をそのまま動詞として使うことはアイヌ語ではできない。これは軽視できない点である。

(6) wakka 「水」: *ku-wakka 「私が水をやる」

これに対し、次のように、動詞が何の文法的マーカーも伴わずにそのまま名詞として用いられる場合（「転換」）がある。

- (7) *pirka apkas ku-ki kuni*
良い 歩き 1 単主格-する ように
en-ekoinkar wa en-kore yan.
1 単目的語-見守る て 1 単目的格-与える なさい
「(魔物がついて来ない) 良い歩きを私がするように私を見守って下さい。」

この例では、*apkas* 「歩く」という動詞が、*apkas* 「歩き」という名詞として、何の形態的変更も受けないまま名詞として使われている¹³。この点は、*laugh* 「笑う」が「笑い」という名詞としても使える英語に似ていると言える。上の例文における *apkas* 「歩く」も、第二類動詞（自動詞）であるので、「歩き」という名詞として用いられたものとみることができる。

5. アイヌ語における自動詞（一項動詞）由来転換名詞の規則性とその原因

前節において英語でも動詞から名詞への転成がみられることに既に触れた。しかし、英語では他動詞から名詞への転成、自動詞から名詞への転成の両方がみられ、相対的に制約がゆるいようである。これに対し、アイヌ語では、原則、自動詞であれば、例外なく名詞として用いられ、規則性が高い。このことはアイヌ語の動詞から名詞への転成が、散発的な偶然的要因によってではなく、体系的な、何らかの明示的な一種の計算規則に基づいていることを予想させる。しかも、統語論に基づく品詞分類で説明できないとすれば、意味論（特に形式意味論）上の規則、すなわち、論理的な原則に基礎を置いている可能性を考える必要がある。

杉本 (1998: 116)、Heim and Kratzer (1998: 36-37, 62)、田中 (2016: 58-59)によって、普通名詞と動詞の意味（外延）を比較してみると、統語論的な品詞の概念では見えない、両者の類同性が見えてくる。まず、*apple* という語彙の「外延」は次のように定義される¹⁴。

- (8) 外延的定義: $[[apple]] = \{apple_1, apple_2, \dots, apple_n\}$
内包的定義: $[[apple]] = \{x \mid x \text{ is an apple}\}$

外延的定義は個物の列挙による定義、内包的定義は性質による定義である。表現と考え方は違うが、両者の外延は同じである。つまり、 $[[apple]]$ という普通名詞の外延は、世界から *apple* であるものをすべて集めた集合とも定義できるし（外延的定義）、*apple* であるという

¹³ 匿名の査読者から、英語の *he did laugh* と平行的な構造だとすれば *apkas* は名詞ではなく動詞である可能性はないか、という指摘を受けた。アイヌ語は原則、動詞は人称接辞を取り、助動詞は取らない。従ってアイヌ語の文法構造からは、人称接辞を含む *ku-ki* は助動詞ではなく他動詞であり、やはり *pirka apkas* は動詞ではなく、目的語（名詞）と考えて良いことになるが、なお一考を要する。ご指摘に感謝したい。

¹⁴ 本来であればアイヌ語の例に置き換えて説明すべきところであるが、原理的部分であるので、諸書の説明に従い、英語の例のままとした。なお、今回は直接言及はしなかったが、形式意味論に関しては吉田 (2004) にも有益な示唆を受けた。

性質を満たす個物すべてを集めた集合としても定義される（内包的定義）。内包的定義は、 λ （ラムダ演算子）という記号を用いて、次のように表記することができる。この表記によると、apple という普通名詞が、形式意味論的には x という項を取る一項述語である、という性質を持つことが明示される。

(9) $[[apple]] = [\lambda x: x \in D_e. x \text{ is an apple}]$ (D_e は個体の集合を表す記号)

他方、動詞はどのように定義されるのであろうか。普通名詞と平行的に見ていくと、run 「走る」（自動詞）の外延の定義は以下ようになる。

(10) 外延的定義: $[[run]] = \{\text{John, Mary, ..., James}\}$

内包的定義: $[[run]] = \{y \mid y \text{ runs}\}$

すなわち、世界から run に当てはまる個物すべてを集めた集合（外延的定義）、または run という性質を満たす個物をすべて集めた集合（内包的定義）と定義される。内包的定義を λ 記号を用いて表すと以下ようになる。

(11) $[[run]] = [\lambda y: y \in D_e. y \text{ runs}]$

これを普通名詞の定義と比較すれば、普通名詞と自動詞との共通性は一見して明らかであろう。すなわち、普通名詞も、自動詞も、形式意味論的には「項を一つ取る述語」とみなすことができるので、「一項述語」という同一のグループに入れられることがわかる。おそらく、アイヌ語はこの性質に着目して、自動詞の名詞化を許容しているものと考えられる。自動詞が例外なく名詞化可能なのは、このような一種の数学的性質に基づいているからだと考えれば容易に理解される¹⁵。

以上の推論の妥当性は、他動詞の場合と比較してみるとよりよく理解される。他動詞 $[[love]]$ の外延は以下のように定義される。

(12) 外延的定義: $[[love]] = \{\langle x_1, y_1 \rangle, \langle x_2, y_2 \rangle, \dots, \langle x_n, y_n \rangle\}$

内包的定義: $[[love]] = \{\langle x, y \rangle \mid y \text{ loves } x\}$ ¹⁶

¹⁵ この説明では、逆のプロセス、すなわち、普通名詞が自由に動詞として使えてもおかしくないことになるが、既に述べたようにアイヌ語では普通名詞を動詞に転用することは通常不可能である。これはおそらく言語学的コストの面から容易に説明が可能である。すなわち、動詞を名詞に転換することは動詞の人称変化を不必要にするという、いわばコストを減らすプロセスであるが、仮に名詞を動詞に転換するとすれば、新たに自動詞か他動詞かを決定して、適切な人称マーカーを付与するというコストを増大させるプロセスとなってしまう。特にやむを得ない必要性がない場合は、このようなコスト増大にはメリットがないので、通常は選択されない、ということなのであると思われる。「コスト」の観点からの言語学的分析については、加藤（2003: 239）を参考としたが、加藤の分析は語用論にかかわるものであり、そのまま転用することには問題があるかもしれない。今後の課題としたい。

¹⁶ $\{x \mid \exists y (y \text{ loves } x)\}$ とする表記もあるがここでは外延が対の形をしていることをわかりやすく示すためにあえてこのように表示した。

$$(13) [[love]] = [\lambda x: x \in D_e . [\lambda y: y \in D_e . y \text{ loves } x]]$$

すなわち、他動詞（二項動詞）は二つの項 x 、 y を取るが、まず目的語にあたる項 x が充足され、次に主語にあたる y 項を取ることがわかる。また、外延的定義から明らかのように、一項述語の外延が「個体の集合」であったのに対して（ $\{\text{apple}_1, \text{apple}_2, \dots, \text{apple}_n\}$ ）、他動詞（二項述語）の外延は、 $\langle x_1, y_1 \rangle$ のような、「主語と目的語がペアになったものの集合」であって、性質が全く異なっていることがわかる。このような形式意味論的定義に従えば、アイヌ語において自動詞がそのまま名詞としても用いることができるのに対し、他動詞はそのままでは名詞として用いることができないのは、外延のタイプが異なっているからだ、と説明できる。また λ 記号を用いた表記から推測されるように、何らかの手段によって目的語 x を充足させてやれば、変数は y 一個となり、一項述語（自動詞）に転換可能であることが容易に推測されるが、アイヌ語では実際に、派生や抱合によって他動詞を自動詞（一項述語）にし、さらに一項述語をそのまま名詞に転換することが可能である。また、転換によって生じた動詞由来転換名詞をさらに名詞と合成して、合成名詞を作ることも可能である。このプロセスを実際のアイヌ語の例を用いて説明すると以下のようになる。

ku 「飲む」は「 y が x を飲む」という意味の他動詞であるが、その外延は次のように表される。すなわち、まず目的語に相当する x が充足され、次に主語に相当する y が充足されるような二項述語である。

$$(14) [[ku]] = [\lambda x: x \in D_e . [\lambda y: y \in D_e . y \text{ } x \text{ } ku]]$$

y と x という二つの項を取る 2 項述語なのでこのままでは名詞になれない。しかし、アイヌ語では、 $wakka$ 「水」という名詞を他動詞に抱合して項数を一つ減らし、 $wakka-ku$ 「水を飲む」という自動詞（一項述語）を作ることができる。その結果、外延は以下のように変化する¹⁷。

$$(15) [[wakka-ku]] = [\lambda y: y \in D_e . y \text{ } wakka-ku]$$

すなわち、一項述語になるので、同じく一項述語である名詞としてそのまま用いることができる。従って、さらに、次のように他の名詞（ $ontaru$ 「樽」）¹⁸と合成されて合成名詞を作ることも可能となる。

¹⁷ 同一の名詞であっても独立の場合と抱合される場合とでは形式意味論的に異なる外延を持つ可能性があり、問題はそう単純ではないが、筆者の能力を超える問題であるのでここでは深く立ち入らない。ここでは途中の意味のプロセスは別として $wakka-ku$ という自動詞の外延のみを問題としていることを了とされたい。

¹⁸ 断定はできないが、 $ontaru$ 「樽」という単語も、実は「自動詞+名詞」型の合成名詞である可能性がある。すなわち、 on 「発酵する」、 $taru$ 「樽」（日本語）と分析され、 on 「発酵する」が名詞として用いられて $taru$ と合成されているとみなすことができる。日本語でたとえて説明すれば「発酵する・樽」ではなくて、「発酵・樽」に当たる形式ということになるであろう。古い時代、日本から輸入された樽は、ウバユリの根からデンプン採取する過程で生じるしぼりかすを、発酵させて保存食を作るための重要な道具であった。

(16) [[wakka-ku]_N][ontaru]_N (表面上は「動詞 (wakka-ku)+名詞 (ontaru)」型合成名詞だが、一項述語の名詞への転換により、「名詞+名詞」型合成名詞の一種となる)

以上、アイヌ語の自動詞の名詞への転換が、形式意味論の原則によって説明できるのではないかという仮説を述べた。しかし、単に「一項述語」という共通性によってのみ転換の規則性を説明するのは説得力に欠ける、という批判があり得るだろう。そこで、最後に、ここで述べた仮説を補強するものとして、完全動詞(ゼロ項動詞)の名詞への転換現象をみることにする。項数の一致が外延の共通性を生み出し、それが品詞転換の容易さの要因になるとすれば、項数の不一致(一項とゼロ項)は逆に外延の差異を生み出し、転換の困難さとなって現れることが予測される。以下ではゼロ項動詞の名詞転換の事例について考察してみることにする。

6. 名詞化における自動詞と完全動詞(ゼロ項動詞)との差異

アイヌ語には完全動詞(ゼロ項動詞)という、主語も目的語も取ることができない動詞がある。主語にあたる名詞が自動詞と合成された、自動詞主語抱合によって形成された動詞である。また、それらは以下の例のように、漠然とした周囲状況として、自然現象を描写するものである。

(17) me-an 「寒さ・ある (=寒い)」、sir-cuk 「状況・秋になる (=秋になる)」、sir-kunne 「状況・暗い (=暗い)」、sir-mata 「状況・冬になる (=冬になる)」、sir-meman 「状況・涼しい (=涼しい)」、sir-paykar 「状況・春になる (=春になる)」、sir-peker 「状況・明るい (=明るい)」、sir-pirka 「状況・良い (=天気が良い)」、sir-popke 「状況・暖かい (=暖かい)」、sir-rupus 「状況・凍る (=寒さが厳しい)」、sir-sak 「状況・夏になる (=夏になる)」、sir-sesek 「状況・暑い (=暑い)」

このようなタイプの動詞の外延をどう考えるかは問題だが、変数を取らないので、形式意味論的には、真 (T) か偽 (F) のいずれかが外延として想定される。

$$(18) [[sirpirka]] = \begin{pmatrix} T \\ F \end{pmatrix}$$

このようなタイプの外延は、自動詞(一項動詞/一項述語)、名詞(一項述語)のいずれの外延のタイプとも異っており、言語的に異なるふるまいをすることが予想される¹⁹。

¹⁹ sir-mata 「状況・冬になる」は動詞としてしか用いられた例がないが、この形式から主語の sir 「漠然とした周囲状況」を取り去った mata 「冬になる」は一項動詞になるはずであり、これは名詞に転換可能と予想される。調べてみると、予想通り名詞として用いられた例がある。mata ek 「冬が・来る」。このことも形式意味論の要因によって品詞転換が左右される証左となるであろう。実質的意味には影響がないと思われる sir の有無が品詞転換の成否を決定している点から考えると、論理的、抽象的レベルでの意味の違いが関与していることを示唆するものと言える。また、完全動詞の me-an 「寒さ・ある (=寒い)」は動詞としての

自然現象という性質上、対象となる動詞の数が限られるため、断定的なことは必ずしも言えないが、これらの語は基本的には名詞としての用例はなく、動詞として用いられた例しかない。この状況は、自動詞（一項動詞）が原則すべて名詞として機能できるのとは、やはり大きく異なっていると言って良いであろう。ただし、sirpirka「天気が良い」のみは、kamuy-sirpirka「神・好天」（＝快晴）のように合成名詞の構成要素となり、名詞として機能していると考えられる例がある。

(19) esoyne inkar wa an, ekasi.

外を 見る て いる おじいさん
 kamuy-sirpirka an ruwe ne wa.
 快晴 ある 事 である よ
 「外を見て、おじいちゃん。快晴なんだよ。」

これまでの議論から、この例は完全動詞は名詞に転換できない、という予想に対する反例とみるべきではないことがわかる。既に3で見たように、アイヌ語には、規則的な品詞転換に加えて、散発的に起こる、句から語へのカテゴリー転換が存在する。この例においては、sirpirka は完全動詞としては名詞に転換できないが、句のレベルになると、いわば超法規的に名詞化が可能になるのだと考えられる。つまり、「天気が良い」という事象は、他の自然現象と比べれば、文化的、社会的に特別に注目されやすい、「目立つ」状況であると考えられる。そのため、通常、名詞化が不可能なタイプの動詞であっても、句のレベルでは名詞として特別に認可されて、名詞語幹 kamuy「神」と合成されているのだと考えられる²⁰。例外はあるものの、完全動詞（ゼロ項動詞）が通常は名詞に転換不可能とみられることは、自動詞（一項動詞）の名詞への転換が規則的であることと著しい対照を示しており、やはり形式意味論の原則が動詞の名詞への転換において、何らかの要因になっていることを支持するものとする。

7. おわりに

形式意味論で用いられる言語は数学者や論理学者が論理学の道具として、自然言語とは独立に定式化したものである。当然、自然言語は形式意味論の原則に忠実に従うとは限らな

用例しかないが、me-「寒さ」が二項動詞の rayke「殺す」に抱合されて一項動詞となった me-rayke「寒さ・殺す（＝～が寒い）」は名詞に転換可能である。isepo numa a-rekutkokari kor, merayke ka a-eranpewtek。「ウサギの毛皮を首に巻くと寒さもわからない」。これらは、アイヌ語において、完全動詞と一項動詞の名詞への転換可能性が表面的な語彙の意味ではなく、外延の抽象的なタイプの差異に基づいてコントロールされているという仮説を支持するものである。もともと、匿名の査読者から kem-an「飢饉・ある」という完全動詞が名詞に転換した yupke kem-an an「激しい・飢饉・ある（起きる）」という例をご教示いただいたのでこのような例がさらに多数見つかった場合、再考が必要かもしれない。ご教示に感謝申し上げます。

²⁰ 散発的であることを考えて名詞句に基づく句単語の場合と平行的に句のレベルでの名詞化としたが、文とも語とも同形であるので厳密には問題がある。ゼロ項動詞は変数を取らないので外延は普通名詞、一項動詞、二項動詞のいずれとも異なり、真理値（真か偽）となる。しかし、外延が他動詞の場合のような対ではなく、一個の要素であるという点で一項動詞と共通性を有するために、散発的な名詞化を許す、とすることが可能かもしれない。その場合、文を語基とすることはモダリティの観点から問題があるし、語を語基とすると、今度は散発的な性格と必ずしも相容れなくなってしまう。今後の検討課題である。

い。現に、動詞の名詞への品詞転換に関しては英語は形式意味論の原則に従っていない（自動詞、他動詞が共に名詞への転成を許す）。これに対し、アイヌ語は、少なくともこの点では、人工的に作られた数学的言語と同じ原理に従う自然言語の実例である、ということができるともかもしれない。今後、世界の言語で、アイヌ語と同様、自動詞だけが名詞化を許す、という言語が存在するかどうか、もし存在するとすれば、アイヌ語とどのような類似点を持つか、あるいは持たないかが興味深い問題の一つになると思われる²¹。

参考文献

- Bloomfield, Leonard (1933) *Language*. London: George Allen & Unwin.
- 知里真志保 (1974/1936)『アイヌ語法概説』(『知里真志保著作集』4. 1-197. 東京:平凡社所収.)
- 知里真志保 (1974/1956)『アイヌ語入門』(『知里真志保著作集』4. 227-413. 東京:平凡社所収.)
- Di Sciullo, Anna Maria and Edwin Williams (1987) *On the definition of word*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Heim, Irene and Angelika Kratzer (1998) *Semantics in generative grammar*. Malden: Backwell.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) (1996)『言語学大辞典第6巻術語篇』東京:三省堂.
- 加藤重広 (2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』東京:ひつじ書房.
- 切替英雄 (1984)「アイヌ語の名詞句の構造と合成名詞」『言語研究』86: 105-121.
- 呉人恵 (2011)「コリヤーク語の名詞化: 動作主・被動作主名詞の意味とシンタックス」『北方言語研究』1: 41-62.
- 中川裕 (1995)『アイヌ語千歳方言辞典』東京:草風館.
- 日本語文法学会 (編) (2014)『日本語文法辞典』東京:大修館書店.
- Pesetsky, David (1994) *Zero Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 佐藤知己 (2008a)「アイヌ語千歳方言における合成名詞の構造」『北方人文研究』1: 55-68.
- 佐藤知己 (2008b)『アイヌ語文法の基礎』東京:大学書林.
- 佐藤知己 (2012)「アイヌ語の復興と現状」『言語研究』142: 29-44.
- 杉本孝司 (1998)『意味論1』東京:くろしお出版.
- 田中拓郎 (2016)『形式意味論入門』東京:開拓社.

²¹ 匿名の査読者の方から、関連する現象として、呉人 (2011)が論じているコリヤーク語の動作主・非動作主名詞の有標性、Pesetsky (1994)が論じている英語の動詞由来名詞の他動性制約、Japhug 語における動詞由来名詞の他動性制約をご教示いただいた (ただし、Japhug 語についてはリンク先に到達できなかった)。コリヤーク語のケースは、他動詞主語の語への包含が統語的原子性への深刻な違反を引き起こすことが要因ではないかと想像され、アイヌ語と同様な説明が与えられる可能性があると思う。他方、Pesetsky の事例、及び Japhug 語の事例は、転換、(ゼロ派生) そのものの事例ではないと思われるため、本稿で扱っている事例とは必ずしも平行的でない点があるが、今後も注視しつつ研究を進めたい。ご教示に深く感謝申し上げます。なお、例が少なく今回、考察の対象とはしなかったが、他動詞がそのまま名詞として用いられる例が一例ある。eat-tuye 「一度・斬り」。この例では eat-tuye 「～が～を一度で斬る」という他動詞が「一切り」という意味の名詞として用いられている。恐らくこれは、eat-tuye という他動詞そのものではなく、「eat-tuye という単語」というメタ言語的な用法によって名詞として用いられたもので、通常の転換による動詞の名詞化とは別に扱うべきものではないかと考える。今後の課題としたい。

Changes of Grammatical Categories in Ainu:
the Interrelationship between Phrase-to-Word and Verb-to-Noun Conversions

Tomomi SATO

(Graduate School of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University)

This paper shows that two grammatical category conversions in Ainu, i. e. that of verb-to-noun conversion and that of phrase-to-word conversion, both play an important role in the formation of Ainu compound nouns and further argues about what enables Ainu intransitive (one-place) verbs to convert to nouns so regularly.

The results of the investigation of these problems are as follows:

1) In terms of formal semantics, common nouns and intransitive verbs are both described as a one-place predicate. Ainu converts intransitive verbs into nouns based on this similarity of their types of extension as shown in the following formulas.

nouns: $[[apple]] = [\lambda x: x \in D_e . x \text{ is an apple}]$

intransitive verbs: $[[run]] = [\lambda y: y \in D_e . y \text{ runs}]$

2) The Ainu language has zero-place verbs (e.g. *sir-pirka* ‘the weather (*sir-*) is fine (*pirka*)’). The extensions of these verbs are either T (true) or F (false) as shown in the formula below. Ainu zero-place verbs cannot be converted into nouns in principle. Again, this can be explained by formal semantics: their type of extension is different from that of one-place predicates like those of intransitive verbs and nouns as is known from the formula above.

$$[[sirpirka]] = \begin{pmatrix} \mathbf{T} \\ \mathbf{F} \end{pmatrix}$$

3) In fact, some sporadic exceptions to 1) and 2) like *eper-se-sito* ‘rice cake which a bear carries on his/her back’ and *kamuy-sirpirka* ‘glorious fine weather’ are also found among Ainu compound nouns. However, these seem to be mere exceptions that are formed by another grammatical category conversion, i.e. phrase-to-word conversion.

In the future research, we should survey various languages to discover ones which follow the same formal semantic restrictions on grammatical category conversions as in Ainu. In addition we should carry out a contrastive study of them with Ainu for its exhaustive description.

(さとう・ともみ tomomis@let.hokudai.ac.jp)